

〈監獄〉のマライア・バートラム ——『マンズフィールド・パーク』における抑圧と処罰

杉野久和

1. はじめに

『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*, 1814) に登場するマライア・バートラム (Maria Bertram) は、女主人公ファニー・プライス (Fanny Price) が幸せを掴む裏で不遇な一生を歩む。ファニーは、作者ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) が女性に必要であると考え「教養」¹⁾や「礼節」²⁾等を備えた人物として評価される³⁾。一方、マライアは不貞行為により作品内外で糾弾される。作品最終章では、受けてきた教育が心には届かなかつたとみなされ (“no moral effect on the mind”) (430)、ノリス夫人 (Mrs. Norris) と「罰」を受ける (“mutual punishment”) (432)⁴⁾。批評家たちは“Maria ruins herself to seduce Henry and destroy his possible happiness with Fanny” (Todd 85) 等とマライアを酷評する。このように、対照的なファニーとマライアについて Tandon は“Fanny’s place should turn out to be at the moral centre of Mansfield, whilst Aunt Norris and Maria are cast into outer darkness” (196) とまとめている。今日まで、主人公ファニーが擁護される一方で、マライアは主に槍玉にあげられる存在であったといえる。

しかしながら、批評家たちによるマライア批判は幾分、盲目的な印象が否めない。その一因としては、道徳的な過ちを犯し咎められるマライアを引き合いに出すことで、女主人公ファニー・プライスを正当化しやすいことが想像できる。Fowler は、ファニーを以下のように評価する。

Certainly Fanny Price is sexually as innocent as other courtesy-book girls. The episode of the theatricals in *Mansfield Park* serves to highlight her delicacy by showing that her mind is quite as delicate as her body. Fanny is shocked by the choice of *Lovers’ Vows* as the play to be performed at Mansfield and by the characters of the two principal women in it.... [But] Maria ignores his[Edmund’s] advice. Her consequent loss of delicacy in acting the part of Agatha leads ultimately to loss of reputation, husband, and home....In contrast to Maria, and to Mary Crawford, who plays the indelicate role of Amelia, Fanny assumes the properly delicate stance and refuses to act a part in the play. (40, 下線筆者)

Fowler は、マライアの愚行を示すことによって、ファニーが優れた人物だと論じている。だが、ファニーを評価することを意図した物差しで、境遇の異なるマライアを測り、批判してよいかは疑わしい。さらに、マライアが存在を前提として相対的

にファニーを擁護するやり方では、ファニー自身が評価し難い人物であることをかえって裏付けかねない⁵⁾。

本作品の読解にはとりわけ慎重さが求められる。廣野はファニーの隠れた一面を明らかにする論文を次の言葉で締める。

ファニー・プライスを、額面通り、存在感の希薄な人物と受け取るか、あるいは、その輝きを掘り起こしてみせるかは、読者の力量に委ねられているようだ。油断のならないしたたかな作者は、あたかも、どこまで作品が読めるか、読者のレベルを試しているように思えるのである。(58)

登場人物を表層的な印象だけで捉えるのではなく、そこに描かれる本質を読み解く重要性とその難しさを説いている。我々読者は、一見地味なファニーの「輝き」を掘り起こすように、安直にマライアを罪深い女と裁くのではなく、マライアの「輝き」ならぬ葛藤を見出すことで改めて彼女を評価することが出来る。本稿は、試された一読者として、バートラム家の長女でありラッシュワース家 (Rushworth) に嫁いだマライアの境遇に焦点を当て、〈監獄〉に閉じ込められてきた彼女に課された処罰について〈再審〉の訴えを提起する試みである。

2. 〈監獄〉生まれのマライア——バートラム家の長女

マライアはバートラム家の長女として生まれたことで、家族に抑圧される。父親サー・トマスは教育熱心で、「有徳の人物」(中尾 70) と肯定されることもあるが、娘たちにとってその存在は恐ろしい。例えば、ファニーがマンズフィールド・パークでマライアたちと出会う場面では、“in greater awe of their father” (13) と父親に怯えている姉妹の姿が描かれる。また、ファニーもサー・トマスに畏れを抱く (“awed by Sir Thomas’s grave looks”) (15)。さらに、サー・トマスがアンティグア (Antigua) から帰宅したとき、屋敷に集まっていた若者たちにとって、彼の存在は「恐怖」 (“horror”) (163) と表現される。母親が父親に意見することはなく、家庭内はサー・トマスによる専制状態である⁶⁾。こういった状況を鑑みて、Wilson はサー・トマスがアンティグアに所有する農園に触れ、論じている。

Austen’s Sir Thomas Bertram owns plantations in Antigua---the acknowledgement of which brings up the uncomfortable topics of slavery and the exploitation of labor and also serves as a metaphor for Sir Thomas’s attitude toward his own children as possessions to be subjugated or sold. (193)

Wilson は、サー・トマス・バートラムの農園所有が、奴隷や労働搾取といった問題だけでなく、子供たちに対する態度にも比喩的に表れて出ていることを指摘している。サー・トマスは絶対的な権力をもつ支配者であり、マライアが抗えないのは勿論のこと、絶えず顔色を窺い続けなければならない人物である。

加えて、家族も長女マライアを精神的に追い詰める。マライアは姉妹における年長者というだけで兄妹の中で唯道德的な模範であることを要求される。サー・トマスが留守の間に若者たちだけで行う素人劇の準備中、それが不道德であると考えた次男エドモンド (Edmund Bertram) は、マライアに説教する。

“But in this matter it is *you* who are to lead. *You* must set the example.---If others have blunder’d, it is your place to put them right, and shew them what true delicacy is.---In all points of decorum, your conduct must be law to the rest of the party.” (131, 下線筆者)

エドモンドが、マライアに彼女自身の立場を弁えるよう促したのは、マライアのためを思ったからではない。むしろ、マライアを除く家族の秩序を守ろうとしたからである。そして、母親バートラム夫人の言葉““Do not act any thing improper, my dear,’ said Lady Bertram. ‘Sir Thomas would not like it’” (131) によってマライアはさらに追い詰められる。母親は、父親の存在をちらつかせることでマライアに自制を促す。実母ですら、娘マライアを第一に思って言ったわけではない。マライアは、家族から要求される一方で、安心感を得ることはない。彼女は、家族から解放されることを“above restraint” (120) と考えている。つまり、家族から“restraint”を課されているとマライアが感じていることが分かる。実家における、マライアの息苦しさは明らかだ。

マライアにとって息が詰まる実家から一転して、第二の人生へと向かう転機となる結婚すら、家族の意思がマライアの意思に優先する。縁談は、ラッシュワースの一目惚れから始まり、ノリス夫人が、自分自身の不安を和らげようと推し進める(37)。ここでも、マライアの幸せを第一に思っている動きではない。結婚するマライアの声はどこにも現れぬまま、結婚問題は周囲を巻き込み、次第に大きくなっていく。縁談を知ったラッシュワースの母親も結婚に対して積極的である。

Mrs. Rushworth acknowledged herself very desirous that her son should marry, and declared that of all the young ladies she had ever seen, Miss Bertram seemed, by her amiable qualities and accomplishments, the best adapted to make him happy. (37)

息子の幸せを願う彼の母親は、マライアを息子の妻として評価する。マライアにとって追い討ちをかけるように、舞踏会では、参加者たちが二人の結婚を喜んでいる(38)。決定打として、縁談はアンティグアにいるサー・トマスまで伝わり、父親の帰宅後に二人が結婚することに決まる。結婚するマライア本人の意思が反映されることなく、縁談は取り返しのつかない段階まで押し進められた。

そもそも、マライアがこの結婚を望んだとは言い難い。婚約を受け入れたのは、年頃の娘としての義務感からである (“Being now in her twenty-first year, Maria Bertram was beginning to think matrimony a duty;... her evident duty to marry Mr. Rushworth if she

could.”) (37)。義務とは、財産ある男性との結婚である。というのも、本作品では、女性が結婚するうえで重要な要素の一つが財産である。作品は、以下の書き出しで幕が開ける。

About thirty years ago, Miss Maria Ward, of Huntingdon, with only seven thousand pounds, has the good luck to captive Sir Thomas Bertram, of Mansfield Park, in the county of Northampton, and to be thereby raised to the rank of a baronet's lady, with all the comforts and consequences of an handsome house and large income.... (5)

資産の少ない女性マライア・ウォード (Miss Maria Ward) は、資産ある準男爵サー・トマス・バートラム (Sir Thomas Bertram) に嫁ぎ、階級が上昇し立派な邸宅と多大な収入を手に入れる。その二人の長女こそマライアである。上記の引用部分の後には、財産ある男性の数少ない様子が皮肉を込めて表現される (“But there certainly are not so many men of large fortune in the world, as there are pretty women to deserve them.”)

(5)。このように、女性の結婚と男性の財産が記述される作品冒頭の第一段落では、さらに、マライアの母親とその妹であるファニーの母親 (Miss Frances)、そして二人の姉であるノリス夫人がどれだけの財力の男と結婚し、その後どのような人生を歩むことになったかが記される。末娘ファニーによる貧しいプライスとの結婚は、三姉妹の「家族にとって迷惑」 (“disoblige her family”) (5) となり、生活が困窮して助けを求めるまで 11 年もの間、姉妹が疎遠になるほど「浅はかな結婚」 (“imprudent marriage”) (6) であるとみなされていた。金持ちの結婚相手を見つけることは自分自身の充実した家庭を作るだけでなく、家族としての重大な責務である。これほどまでに結婚と財産が結びついた状況で暮らすマライアは、財産ある男性ラッシュワースからの求婚を断れない。マライアの縁談を聞いた次男エドモンドは訳知り顔でラッシュワースの愚鈍さを説くが (“If this man had not twelve thousand a year, he would be a very stupid fellow.”) (38)、叔母達 (ノリス夫人、プライス夫人) が財産のない男と結婚したために、彼女たちの現在の生活状況が異なっていることをマライアは重々承知している。

マライアがラッシュワースとの縁談を断っていたと仮定すると、彼女は父親から恐ろしい仕打ちを受けていた可能性がある。実際に、ファニーがヘンリーからの求婚を断ったとき、納得できないサー・トマスは判断を覆すようファニーに圧力をかける。サー・トマス自ら説得したり、エドモンドを使って説得させたりする。サー・トマスはファニーに対して “ingratitude” (294) と言い、エドモンドはファニーに向かって “You are mistaken, Fanny.” (323) と語りかける。それでも屈しないファニーをサー・トマスは貧しい実家へと送り返すことを計画する。

[Sir Thomas's] prime motive in sending her[Fanny] away, had very little to do with propriety of her seeing her parents again, and nothing at all with any idea of making her happy. He certainly wished her to go willingly, but he as certainly wished her to

be heartily sick of home before her visit ended; and that a little abstinence from the elegancies and luxuries of Mansfield Park, would bring her mind into a sober state, and incline her to a juster estimate of the value of that home of greater permanence, and equal comfort, of which she had the offer. (341-42, 下線筆者)

自分こそが正しい価値観の持ち主だと信じ、ファニーに辛い現実をつきつけることで、自らに従わせようとするサー・トマスの計画には、明らかに悪意がある。この結果、ファニーはサー・トマスの真意を知ることなく実家へ送られる。サー・トマスの狙い通り、ファニーは実家で辛い思いをする。マライアの不倫があってこそファニーはマンズフィールド・パークへ連れ戻されたのであり、事件がなければ永久に追放されていたかもしれない。つまり、仮にマライアがラッシュワースを拒絶していた場合、ファニーがマンズフィールド・パークから追放されたように、サー・トマスによって何らかの措置がとられていたことは容易に想像できる。むしろ、実の娘であるマライア故に、読者の想像を絶する残虐な手段がとられていた可能性は否定できない。マライアがラッシュワースの求婚を断るということは、この危険に独りりで身を曝すということである。

マライアにとってバートラム家の長女であることは人生を歩む足枷である。マライアは、日々、厳格な父親に怯えながら暮らし、家族内で孤立感を味わい、結婚相手さえ家族の利己的な思惑で決められる。仮に断るようなことがあれば、どんな理由であるにせよ父親から厳しい仕打ちを受けかねない。作品に描かれる彼女の生い立ちは、抑圧と懲罰というあたかも〈監獄〉の生活を連想させる。

3. 〈監獄〉に嫁ぐマライア——ラッシュワースとの婚約

義務感からラッシュワースと婚約したマライアは、魅力的な男性ヘンリー (Henry Crawford) と出会うことで、新たな苦しみを味わう。彼女には、少なくとも三つの苦悩がある。

第一に、利口で鋭敏なヘンリーの存在によって、マライアの婚約者ラッシュワースの愚鈍さが際立って見える。長女という〈監獄〉に閉じ込められているマライアが解放される唯一の希望は婚約者ラッシュワースに委ねられる。しかし、彼の愚鈍さはあまりに深刻であった。

Mr. Rushworth was from the first struck with the beauty of Miss Bertram, and being inclined to marry, soon fancied himself in love. He was a heavy young man, with not more than common sense, but as there was nothing disagreeable in his figure or address, the young lady was well pleased with her conquest. (37, 下線筆者)

下線で強調した、ラッシュワースが鈍い男性であるという描写自体は地の文だが、下線部以降“but...”にはそれを前提とするマライアの心情が描かれており、客観的視点とマライアの視点を兼ねていると解釈できる。つまり、マライアは彼が愚鈍であ

ることに結婚以前で気づいている。財産ある男を手に入れなければならない義務感から、彼女はその意識を我慢して飲み込むことで、彼との婚約を受け入れる。しかし、彼女が目を瞑った彼の愚鈍さは魅力的な男性ヘンリーとの対比によって鮮やかに浮かび上がってくる。ヘンリーの演技は大変見事で、劇に反対するファニーすら彼の腕前を認めざるを得ない。

As far as she[Fanny] could judge, Mr. Crawford was considerably the best actor of all; he had more confidence than Edmund, more judgement than Tom, more talent and taste than Mr. Yates.---She did not like him as a man, but she must admit him to be the best actor, and on this point there were not many who differed from her. (153, 下線筆者)

ファニーは異性としてヘンリーが好きだとはいえないものの、マンスフィールド・パーク随一の役者としては評価している。これに対して、ラッシュワースはそもそも台詞を覚えられない。マライアはその台詞を削ってやるもなお、彼は覚えられない。これだけでも十分対照的だが、劇の台詞の内容ではなく台詞の数を自慢げに語る姿 (“I come in three times, and have two and forty speeches.”) (130) は上辺だけを捉え物事の内実を理解できない人間であることを自ら曝け出している。これだけに留まらず、ラッシュワースが役の内容ではなく舞台衣装を気にしている様子 (“Mr. Rushworth liked the idea of his finery very well”) (129) には、物事の優先順位を見抜けない彼の認識力の低さが表れている。さらに、彼は場の雰囲気を感じ取る感性も欠如している。エドモンドが素人劇に反対し憤りを示していて、誰も口に出来ない状況にも拘わらずラッシュワースは平気で劇を話題にする迂闊さである (129-30)。そして、素人劇の練習中、一家の主サー・トマスが帰宅してもラッシュワースは自分のとるべき行動が分からず狼狽える (“Shall I go too?---Had not I better go too?---Will not it be right for me to go too?”) (164)。彼の姿は、第三者にとっては滑稽であっても、婚約者マライアにとっては実に愚かで深刻な問題である。ヘンリー・クロフォードという魅力ある男性と接することによって、婚約者ラッシュワースは、頭が弱く、人の気持ちを理解できず、判断力もない人物だという事実を、マライアはまざまざと突きつけられた。

第二の苦悩として、婚約を理由に、俗的な快樂の一切が禁じられる。婚約者である長女マライアは、四つしか年が違わないファニーを含む若者たちの輪から排除される。彼らが食事で客間に集まって楽しんでいるときに、マライアは招かれない (“[The] happiness of one of the party was exceedingly clouded. Miss Bertram was the one. Edmund and Julia were invited to dine at the parsonage, and *she* was excluded.”) (66-67)。婚約を理由に仲間外れにされたマライアだが、肝心な婚約者ラッシュワースは彼女のところへやって来ない (“Mr. Rushworth did *not* come”) (67)。長女としての義務感から婚約したマライアは、愚鈍な婚約者によって、除け者にされたまま身動きがとれない。

第三の苦悩として、マライアは好意を寄せる男性ヘンリー・クロフォードも手放さなければならない。サザートン (Sotherton) へ向かう際に彼の隣の席を望むマライアと妹ジュリア (Julia Bertram) は互いにそうとは言い出せない。しかし、グラント夫人 (Mrs. Grant) の言葉によって明暗がわかる。

While each of the Miss Bertrams were meditating how best, and with most appearance of obliging the others, to secure it, the matter was settled by Mrs. Grant's saying, as she stepped from the carriage, "As there are five of you, it will be better that one should sit with Henry, and as you were saying lately, that you wished you could drive, Julia,..." (75)

姉妹が欲した座席はジュリアに手配される。語り手は、嘲るように“Happy Julia! Unhappy Maria!” (75) と描写する。好意を抱く男性ヘンリーを、パートナーがまだいない妹に眼前で譲らなければならず、“[Maria] took her seat within, in gloom and mortification” (75-76) とマライアは肩を落とす。

このように、マライアにとって長女という〈監獄〉から抜け出す婚約も、結局は彼女を解放するとは言い難い。彼女にとってラッシュワースと婚約することすら〈監獄〉である。ラッシュワース家の屋敷を訪れたマライアは、ヘンリーとの含みのある会話で、彼女の抑圧された想いを打ち明ける。マライアが、ヘンリーとラッシュワースとの三人でラッシュワース家の土地を歩いて検分している場面で、マライアは目の前にある「鉄門」(“iron gate”) の奥へ進みたいと口にする (91)。ヘンリーが加勢することで、ラッシュワースがその門を開ける鍵を取りに屋敷へと戻ることになり、残ったマライアとヘンリーは以下の会話を交わす。

“You[Henry] think her[Julia] more light-hearted than I[Maria] am.”

“More easily amused,” he replied, “consequently you know,” smiling, “better company. I could not have hoped to entertain *you* with Irish anecdotes during a ten mile's drive.”

“Naturally, I believe, I am as lively as Julia, but I have more to think of now.”

“You have undoubtedly---and there are situations in which very high spirits would denote insensibility. Your prospects, however, are too fair to justify want of spirits. You have a very smiling scene before you.”

“Do you mean literally or figuratively? Literally I conclude. Yes, certainly, the sun shines and the park looks very cheerful. But unluckily that iron gate, that ha-ha, give me a feeling of restraint and hardship. I cannot get out, as the starling said.” As she spoke, and it was with expression, she walked to the gate; he followed her. “Mr. Rushworth is so long fetching this key!” (93, 下線筆者)

「鉄門」の奥に目をやるヘンリーは、マライアに「君の前にはとても晴れやかな景

色が広がっている」と仄めかす。マライアは、それが「文字通り」(“literally”)の発言なのか、あるいは「比喩的」(“figuratively”)な意味を含んでいるのかと問いかける。一度は、文字通り受け取るマライアの発言は、次第に多義性を帯びてくる。そして、最後の一文では比喩的に自身の辛い現状を嘆く。彼女が言う「鍵」(“key”)を文字通り解釈すると、敷地の奥に進むための「(物理的な)鉄門」を開ける鍵である。そして、比喩的に解釈すると、自由を制限してきた「(精神的な)鉄門」を開ける鍵である。つまり、彼女が用いる「鉄門」という比喩にはラッシュワースとの婚約が含意されている。最後の台詞は「ラッシュワースは、屋敷の奥地に繋がる門の鍵を取りに時間がかかっている」という想いと同時に、「ラッシュワースは未だに私を幽閉する門を開けてくれない」という表明である。ラッシュワースの敷地内で、“restraint and hardship”を連想させてしまう「鉄門」から、ラッシュワースとの婚約もまさしく〈監獄〉と解釈できる⁸⁾。

4. 〈監獄〉に閉じ込められるマライア——ノリス夫人との同居

マライアにとって父親不在の時間が、比較的安心して過ごすことの出来るひと時である。しかし、父親が11月に帰宅するという目途が立つと、彼女は“the black month”(100)と嫌悪感を露わにする。父親の帰宅は、恐怖の再来のみならず、ラッシュワース邸への強制的な移送も意味しているので、ジュリア以上に気が重い(“Maria was more to be pitied than Julia, for to her the father brought a husband,...”) (100)。それでも、マライアは、残された最後の数か月に幸せを見出そうと躍起になる。父の帰宅までには三か月あるので、何らかの事情で予定通りに帰ってこないのではないかと期待交じりに予想する。

It would hardly be *early* in November, there were generally delays, a bad passage or *something*; that favouring *something* which every body who shuts their eyes while they look, or their understandings while they reason, feels the comfort of it. It would probably be the middle of November at least; the middle of November was three months off. Three months comprised thirteen weeks. Much might happen in thirteen weeks. (100)

マライアは父親の帰宅という現実から必死に目を背けようとする。イタリック体“*something*”は、言葉にするのが憚れる事態、つまり永遠に帰って来ない可能性を内包した彼女の期待のあらわれである。「三か月」を「十三週」とより細かく計算し直す思考過程は、一週すら疎かに過ごせないと構える心の準備といえよう。あたかも〈終身刑〉を言い渡され、その〈執行猶予〉が間もなく終わることを告げられた罪人の心理である。残された期間に、マライアは精いっぱい羽を伸ばす。劇の役でヘンリーに選ばれたときに彼女は喜びを隠しきれない(“Maria was preferred; the smile of triumph which Maria was trying to suppress shewed how well it was understood,...”) (125)。彼女は素人劇の練習を通じて、ヘンリーと疑似的な恋愛関係まで体験でき

た。ただし、皮肉にも、本物の恋愛ではなく、演劇の練習であり、現実世界での幸福には程遠い。

父親が帰宅すると、マライアはラッシュワース家の妻となる。ヘンリーと関係が絶たれることと、愚鈍なラッシュワースの妻に収まることへの嫌悪感から、彼女は父親が返ってくる前のマンスフィールド・パークを思い焦がれる（“The liberty which his[Sir Thomas’s] absence had given was now become absolutely necessary”）（187）。しかし、無情にも彼女はマンスフィールド・パークを発って結婚生活へと向かう（“It was done and they[Mr. Rushworth and Maria] were gone.”）（188）。

その後、マンスフィールド・パークのみならず、世間を震撼させる事件が新聞で報道される。マライアの〈脱獄〉である。マライアは、夫ラッシュワースが不在の際に家を飛び出す。事件の概略は新聞の記事として取り上げられる。

[It] was with infinite concern the newspaper had to announce to the world, a matrimonial *fracas* in the family of Mr. R. of Wimpole Street; the beautiful Mrs. R. whose name had not long been enrolled in the lists of hymen, and who had promised to become so brilliant a leader in the fashionable world, having quitted her husband’s roof in the company with the well known and captivating Mr. C. the intimate friend and associate of Mr. R. and it was not known, even to the editor of the newspaper, whither they were gone. (408-9)

記事は、妻マライア（“Mrs. R.”）がヘンリー（“Mr. C.”）とともに逃亡したことを伝えている。サー・トマス意向によって実家に送られていたファニーは、ポーツマスでこの記事を目にする。この記事に先立ってメアリーから届いていた手紙では、ヘンリーが誘惑されたかのような書きぶりである。

A most scandalous, ill-natured rumour has just reached me[Mary], and I write, dear Fanny, to warn you against giving the least credit to it, should it spread into the country. Depend upon it there is some mistake, and that a day or two will clear it up--at any rate, that Henry is blameless, and in spite of a moment’s *etourderie* thinks of nobody but you. Say not a word of it--hear nothing, surmise nothing, whisper nothing, til I write again. I am sure it will be all hushed up, and nothing proved but Rushworth’s folly. If they are gone, I would lay my life they are only gone to Mansfield Park, and Julia with them. But why would not you let us come for you? I wish you may not repent it.

“Your’s, &c.”（406, 下線筆者）

“Henry is blameless”や“Rushworth’s folly”という表現から、ヘンリーが受動的であった可能性が想像できる。実際、後に読者へと明かされるのだが、ヘンリーはマライアを連れ去るつもりではなかった。マライアへの愛情を抱いていたわけでもないが、

素っ気ない態度を示され、「屈辱に感じた」(“mortified”) (434) ヘンリーは、軽率にもマライアを誘惑し、思っていた以上にマライアが本気になったことで、取り返しのつかない事態を招いてしまった。つまり、マライアが閉じ込められた〈監獄〉の前で、ヘンリーがマライアの心の〈鍵〉をちらつかせたが故に、マライアはそれを手に取り自ら〈鉄門〉を開け飛び出したのだ。実家やラッシュワースとの関係について用いられていた“restraint”という語を用いて、マライアの当時の心境が“without any restraint” (418) と表現されている。つまり、彼女が生まれたときから絶えず閉じ込められ続けてきた〈監獄〉から初めて心身ともに解放された瞬間である。

事件について、エドモンドは“evil”という言葉を用いて怒りを示す (423)。また、サー・トマスは、これまで行ってきた自身の教育を反省する。

Here had been grievous mismanagement; but bad as it was, he gradually grew to feel that it had not been the most direful mistake in his plan of education. Something must have been wanting *within*, or time would have worn away much of its ill effect. He feared that principle, active principle, had been wanting, that they had never been properly taught to govern their inclinations and tempers, by that sense of duty which can alone suffice. They had been instructed theoretically in their religion, but never required to bring it into daily practice. To be distinguished for elegance and accomplishments---the authorised object of their youth---could have had no useful influence that way, no moral effect on the mind. He had meant them to be good, but his cares had been directed to the understanding and manners, not the disposition; and of the necessity of self-denial and humility, he feared they had never heard from any lips that could profit them. (430, 下線筆者)

サー・トマスは娘たちに、自分の性向や気質を抑制することを教えていなかったこと、宗教的な教育を実生活においても実行するよう求めていなかったことを反省する。彼は、娘たちの駆け落ちを自分の“mismanagement”の結果と捉えている。しかし結局のところは、サー・トマスにとって娘はあくまで“management”する対象でしかない。親としてではなく、管理者としての性格が浮かび上がる。マライアには一切弁明の機会が与えられておらず、彼女の捨て身の行動の真意が、父親には一切届かない。マライアを批判する“no moral effect on the mind”は、同時にサー・トマス自身にも当てはまる。マライアは、ノリス夫人と二人で暮らすように、みたび〈監獄〉へ閉じ込められる。

マライアは、家庭内だけでなく社会からも制裁を受ける。ラッシュワースは解放される一方で、マライアは咎められる。

He[Mr. Rushworth] was released from the engagement to be mortified and unhappy, till some other pretty girl could attract him into matrimony again, and he might set forward on a second, and it is to be hoped, more prosperous trial of the state---if duped,

to be duped at least with good humour and good luck; while she must withdraw with infinitely stronger feelings to a retirement and reproach, which could allow no second spring of hope or character. (431, 下線筆者)

一目惚れから始まった結婚から離婚に至ったラッシュワースは再婚する。彼が後妻に選んだのは、やはり外見しか記述されない女性である。それに対して、マライアは次の恋愛どころか世間から完全に断絶させられ、非難される。決して許されることのないマライアは、〈脱獄犯〉として扱われたまま、作品の幕が閉じる。

5. 結論

作者オースティンはカサンドラ (Cassandra Austen) に宛てた手紙で“I consider everybody as having a right to marry *once* in their lives for love” (Letters 240) と記しており、ファニー(Fanny Knight)に宛てた手紙には “[N]othing can be compared to the misery of being bound *without* Love, bound to one, & preferring another” (Letters 418) と記している。誰も一度は愛のある結婚をする権利があると考えたオースティンにとって、愛のない結婚ほど惨めなことはないのである。しかし、彼女が描き出したマライアの結婚はまさに愛のない結婚である。作者が誰も一度は権利があると述べた愛のある結婚を求めたことで——マライアはヘンリーを愛していた (“She loved him”) (434) ——不道徳・不謹慎と罰せられる。

出来事だけで整理すると、マライアは、バートラム家の長女として生まれ育ち、金持ちの男ラッシュワースと婚約するも、ヘンリーとの危険な戯れを経験した後、結婚する。その後不倫し、実家マンズフィールド・パークから追放された女性である。しかし、彼女の境遇や心情を読み解いた場合、マライアは生まれながらにして生涯〈監獄〉で過ごすことが運命づけられていたかのような人物と分かる。彼女は長女であることから自己を抑制することが当然のこととして求められ、誰にも内面を顧みられることのない〈監獄〉で生まれ育ち、愚鈍なラッシュワースの妻という新たな〈監獄〉に移され、僅かな望みをもって〈脱獄〉する。そして、新聞で大々的に報じられる。最後には、ノリス夫人とともに「罰」せられる (“mutual punishment”) (432)。

マライアには、不倫せずしてヘンリー・クロフォードと結ばれる道はない。何故なら、ラッシュワースとの婚約を断っていればヘンリーからの誘惑はないからである。ヘンリーはマライアが婚約しているがために、面白がってマライアを誘惑した (“An engaged woman is always more agreeable than a disengaged”) (43)。つまり、マライアはヘンリーを手に入れるにはラッシュワースとの婚約が不可欠で、社会的に許容される形でヘンリーと結ばれることは不可能である。そして、勿論“restraint”と形容されるラッシュワースとの結婚を受け入れざるを得なかった。マライアは抑圧され続ける人生か、たった一度の我儘と引き換えに糾弾される人生かという選択肢しか与えられていなかったことに作品の結末で父親サー・トマスも兄エドモンドも気づかない⁹⁾。

マライアが罰せられることは、正当化される。あるいは、正当化しているという事実にすら気づかないほど、至極当然のこととして受容される。しかし、その処罰が妥当かどうかは慎重に見極めなければならない。フーコー (Michel Foucault) は『監獄の誕生』(*Surveiller et Punir --- Naissance de la Prison*) で以下のように指摘する。

監獄、すなわち司法装置のなかの最も暗い領域は、素顔のままではもはや自らを行使する気力をもたぬ処罰権力が一つの客観性の領域をひそかに組立てて、そこでは懲罰が治療として白日のもとに機能をはたすことができ、判決が知の言説のなかに組入れられうる、このような場なのである。(253)

作品最終章において、マライアが閉じ込められる〈監獄〉は、サー・トマスによる恣意的な処罰にも拘わらず「客観性の領域をひそかに組み立て」然るべき対応かのように受け入れられる。そして、マライアの幽閉という「判決」が「知の言説のなかに組入れられ」る。この結果、サー・トマスは「有徳の人物」(中尾 70) として評価される。

そうであるとするならば、作品の結末は大変危険な状態にある。マンスフィールド・パークに呼び戻され、高く評価されることになるファニーは、サー・トマスが望む道徳的価値観を体現したのであり、彼の道徳的価値観というのは、多分に植民地主義、父権性といった暴力的な精神を内包している。仮に作品のタイトルを *man's field park* と解釈した場合、サー・トマスの価値観が伝承される場所として、作品の舞台、タイトルあるいは作品それ自体が一つの皮肉をなしている¹⁰⁾。

オースティンは具体的な植民地政策や家父長制という特定の仕組みを批判したというよりもむしろ、そこに内在する精神を批判したといえる。高木は「Austen の意図は、Wollstonecraft と同様、誤った教育を受けた女性ではなく、そのような女性を生み出した社会的、文化的背景そのものを攻撃することにあつた」と指摘する(1554)。これまで、フェミニズムやポストコロニアリズムなど社会的問題への発展という議論の誘惑に駆られたのか、その陰で孤立し続けたマライアが見過ごされてきた。マライア・バートラムとは、この世に生を受けた瞬間から家族に抑圧され続け、作者が女性には「一度はある」と記した愛のある結婚を望んだが故に処罰され、読者にも蔑まれてきた女性である。無罪とは言い難いまでも、出版から 200 年経った今日、〈減刑〉もしくは〈釈放〉の可能性を視野に、彼女の評価について〈再審〉を行う余地はないであろうか。

註

¹⁾ Austen 作品における「教養」のテーマについては宮西を参照。

²⁾ Fowler は当時の価値観を用いて以下のようにファニーを位置づける。“Fanny embodies the ideals prominent in courtesy books throughout the eighteenth century and into the nineteenth: she is modest and timid, blushes frequently, eschews wit, never flirts, shuns the attentions of rakes, and is

properly delicate in both body and mind. She is, in short, a courtesy-book girl par excellence.” (41)

³⁾ Gilbert and Susan はファニーが“become a true Austen heroine” (165) と記している。また、Tanner は“[Fanny] is the true ‘inheritor’” (172) と記している。

⁴⁾ 引用は全て Austen, Jane. *Mansfield Park*. Ed. Sutherland, Kathryn. London: Penguin Classics, 2014. を使用。以下、本書からの引用ページは括弧内に数字で示す。

⁵⁾ 他に比較した例として、Fleishman が“‘It becomes possible at the same time to learn more of Fanny by measuring her against the other characters in the novel.’” (47) と表明した章の最終段落で“‘In the course of the action, the Bertrams as a family are improved by pruning and grafting: Maria, Julia, and Mrs. Norris are ejected from Mansfield and Fanny and Susan are welcomed into it.’” (56) と述べている。

⁶⁾ Ferguson は“‘Mansfield Park ideologically as an institute that rallies to disempower anyone who jeopardizes Sir Thomas’s feudal reign.’” (124) と指摘する。

⁷⁾ ファニーの「孤立 (孤独)」については指摘されてきた (入野『『マンスフィールド・パーク』における秩序と再生』4; 北脇 43-48; Niece 236; 植松 108)。しかし、実際のところファニーは、兄ウィリアム (William) や妹スーザン (Susan) という心強い肉親がいるだけではなく、エドモンドやバートラム夫人に必要とされる。また、作品最終章では語り手が“My Fanny”と述べる (428)。それに対してマライアは、父親からの圧政に加えて、妹ジュリアは恋敵であり、エドモンドやバートラム夫人も支えてくれる存在とはいえない。

⁸⁾ この一連の場面について、Ferguson は“‘Maria symbolically and literally refuses to be imprisoned.’” (128) と表現する。廣野は「籠の中の鳥」という比喻を用いて、マライアの心境とヘンリーの言動を分析している (36)。中尾は、この箇所と言及した上で、マライアの駆け落ちが「予めここに暗示されている」と言及する (84)。

⁹⁾ エドモンドは、ヘンリーとの不倫騒動直前にあったマライアを見て“‘There is no appearance of unhappiness.’” (393) と捉えており、マライアの内面には理解が及ばない。

¹⁰⁾ 最終章では、ファニーから妹スーザンへも継承される様子が描かれる。ファニーが結婚した後のバートラム夫人の想い (“‘No happiness of son or niece, could make her[Lady Bertram] wish the[Fanny’s] marriage. But it was possible to part with her, because Susan remained to supply her place.’”) には、彼女たちを代替可能な対象物とみなしている心理が読み取れる。実際、スーザンは“‘First as a comfort to Fanny, then as an auxiliary, and last as her substitute’”と必要性が増すことで“‘[Susan] was soon welcome, and useful to all’”と、受け入れられる (438, 下線筆者)。サー・トマスの価値観は親というより管理者としての性格が色濃く、使い勝手の良さを示す“useful”として評価されるスーザンが受け入れられるということは、サー・トマスの価値観が着実に伝承されている証である。

参考文献

Austen, Jane. *Mansfield Park*. Ed. Sutherland, Kathryn. London: Penguin Classics, 2014.

Austen, Jane. *Jane Austen’s Letters to her sister Cassandra and others*. Ed. Chapman, R.W. 2nd ed. London: Oxford UP, 1964.

Baker, William. *Critical Companion to Jane Austen: A Literary Reference to her Life and*

- Work. New York: Facts On File, Inc.. 2008.
- Fleishman, Avrom. *A Reading of Mansfield Park*. Minneapolis: Lund Press, Inc., 1967.
- Ferguson, Moira. “*Mansfield Park: Slavery, Colonialism, and Gender.*” *Oxford Literary Review*. Vol. 13, No. 1/2. 1991. 118-39.
- Fowler, Marian E. “The Courtesy-Book Heroine of *Mansfield Park.*” *University of Toronto Quarterly*. U of Toronto Press, Vol. 44, No.1. 1974. 31-46.
- Gilbert, Sandra M., and Gubar, Susan. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Yale UP, 1980.
- Niece, Jennarae. “Slipping into the Ha-Ha: Metatextuality, Performance, and the Farce of *Mansfield Park.*” *The Midwest Quarterly*. Vol. 59, No. 2. 2018. 232-46.
- Tandon, Bharat. *Jane Austen and the Morality of Conversation*. London: Anthem Press, 2003.
- Tanner, Tony. *Jane Austen*. Basingstoke: Macmillan Education Ltd, 1986.
- Todd, Janet. *The Cambridge Introduction to Jane Austen*. Cambridge UP, 2006.
- Voskuil, Lynn. “Sotherton and the Geography of Empire: The Landscapes of *Mansfield Park.*” *Studies in Romanticism*. Vol. 53, No. 4. 2014. 591-615.
- Wilson, Cheryl A. *Jane Austen and the Victorian Heroine*. Switzerland: Palgrave Macmillan, 2017.
- Zirker, Angelika. “‘The Road to Happiness’: Jane Austen’s *Mansfield Park.*” *Connotations*. Vol. 20, No. 2-3. 2010/11. 131-54.
- 入野賀和子 『『マンスフィールド・パーク』における秩序と再生』、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第44号、2007年、1-11頁。
- 『『マンスフィールド・パーク』：受動性の勝利』、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第35号、1997年、69-82頁。
- 植松みどり 『ジェイン・オースティンと「お嬢さまヒロイン」』、朝日出版社、2011。
- 北脇徳子 「マンスフィールド・パークの存続の危機」、『京都精華大学紀要』第42号、2013年、29-51頁。
- キャロル・シールズ 『ジェイン・オースティンの生涯——小説家の視座から』、内田能嗣・惣谷美智子訳、世界思想社、2009年。
- 高木真由美 「Lady Bertram と Fanny Price——*Mansfield Park* における服従する女と反抗するヒロイン——」、『立命館文學』第626号、立命館大学人文学会、2012年、1545-61頁。
- 中尾真理 『ジェイン・オースティン—象牙の細工—』、英宝社、2007年。
- 廣野由美子 「ファニー・プライスの実像：『マンスフィールド・パーク』に関する物語論的考察」、『英文学評論』第82号、京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会、2010年、29-58頁。
- Foucault, Michel. *Surveiller et Punir---Naissance de la Prison*. Gallimard, 1975. ミシェル・フーコー 『監獄の誕生——監視と処罰』、田村俣訳、金羊社、1977年。
- 宮西光雄 「JANE AUSTEN と女性教養」、『英文学研究』第23号、1、1943年、27-38頁。

**Maria Bertram in the Prisons:
Oppression and Punishment in *Mansfield Park***

SUGINO Hisakazu

Abstract: This paper examines the treatment of Maria Bertram in *Mansfield Park*. She has been criticised on a common presumption as an immoral character in contrast to and in favour of Fanny Price, but has never been fully illuminated. Focusing on her circumstances offers new insights into her character, and it contributes to an understanding of the work. This paper begins with examination of the oppression by her family. It then considers the anguish of her engagement; finally, it traces the punishment she receives. Her repeated utterances “restraint” and the punishments associate with imprisonment. This paper appeals, against too harsh punishment, for fair judgement on Maria, who has been imprisoned since the publication (1814).